

# ふれあい

大代地区コミュニティ推進協議会

事務局：大代地区公民館 ☎ 364-8442

## 「山茶花大学」館外

### 研修に参加して

大代北区 鈴木絹子

九月九日(日)山茶花大学生は、館外研修に出かけました。

台風は去り、朝から澄みきった秋空に恵まれ穏やかな一日でした。

大学生三十三名の一行は、午前七時三十分に大代地区公民館を出発しました。まもなく車内では、公民館の方の進行により三人の方々の挨拶があり、いろいろなユーモアやロマンスもとびだし、とても明るい雰囲気の中で、館長さんの音頭で「エイ・エイ・オー」と全員の元気な掛け声で研修の旅がはじまりました。

車は一路山形自動車道を走り、山形市内から平清水に入り、平清水焼七右エ門窯の焼き物教室に着き、早速実習に入りました。ソフトな山形弁のおばさん先生が、魔法使いのような巧みな手つきで、粘土の作品を作り説明した後、みんなは作品造りに無我夢中。一時まで完成の予定が十時を過ぎるとボツボツ完成者が出て、さすが「ベテラン」いや初めて作った人もおられたとか。完成すると一人一人の顔に、満足感が輝いていました。

世界に一つしかないオリジナルの作品。一ヶ月後に出来上がって来るのがとても楽しみです。公民館祭りに展示されるとか。三十数個のすばらしい芸術の作品が並ぶことでしょう。

あいさつは心のふれあい

出会った人と

あいさつしましよ

術の作品が並ぶことでしょう。

次に上山市にある歴史ロマン街道樽下宿「こんにやく番所」で昼食をとりました。「たかが蒟蒻されど蒟蒻」出羽街道にあつて、昔大名行列が通った宿場で、今もその面影がある所でした。全部こんにやくで作った懐石膳の料理で舌鼓を打ちました。ここは誰でも来れそうで来れない所だと言う人もいました。

こんにやくで満腹した一行は、山形物産館でおみやげ探し、名物は、「おいしい物は」家族や近所の人に旅のおみやげにと・・・各自買い物でした。

三ヶ所目は、天童市を抜けて花笠音頭に歌われる「めでた、めでたの若松様よ」の縁結びの若松観音様へと車は走り、細い山道を登り、行き合う車の譲り合いで、運転手さんも山道は大変でした。だんだん山の上に登ると正に神秘的な空気が漂って来ました。境内には駐車場があり、奥には古い建物の寺務所がたたずみ、人々は朱印帳に記帳の依頼をしていました。階段を登り、山の上の七百八年に開山された御堂の観音様に、手を合わせ参拝をして、鐘付堂の山から美しい町を一眺して山を下りました。

一日の研修を終え車はいよいよ帰路に。皆さん疲れもなく車内で音楽を聞いたり、公民館に着く頃には、「さざんかの宿」を大合唱しました。

日帰りでのようすばらしい研修

ご祝儀 お見舞いは

三千元を限度にし

お返し物はしな

ないようにお互い気を配りま

が出来ました事は、計画を立てて下さった公民館の方々、関係の皆様のおかげだと、心から感謝しています。

山茶花大学の研修で見聞を広め若返った気持です。これからもみんなで参加することを希望いたします。

## 貞山運河周辺の清掃

### コミュニティ環境美化部

大代地区の皆さんのご協力をお願いいたします。

■日時 十月二十四日(日)

午前六時から(一時間程度)

※雨天の場合は中止(小雨決行)

■集合場所 大代地区公民館前

## 大代地区コミュニティ主催

☆グランドゴルフ大会について

■日時 十六年十一月十四日(日)

九時集合 九時三十分開始

■場所 大代緩衝緑地公園

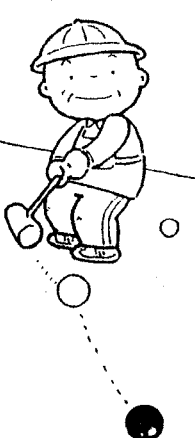
桜の木内(あずまやのある場所)

商品及び参加賞を用意しておりますので、年令に関係なく数多くの方の参加をよろしく願います。

■締め切り月日 十六年十一月七日

■申し込み 大代地区公民館まで

■体育部より



## 第十一回大代地区区民運動会のお知らせ

日時 十月十一日(月) 体育の日

午前九時～十二時三十分

場所 大代緩衝緑地公園

(雨天の場合は中止)

参加対象者 大代地区住民

大代地区子供会育成連合会

会長 鈴木 良英



## 大代地区公民館

### グランドゴルフ大会

■日時 十月二十八日(木)

午前九時三十分～十二時まで

■雨天時 十月二十九日(金)に実施

■種目 個人戦(2ラウンドの合計で順位を決定)

■場所 大代緩衝緑地公園

(貞山運河側)

■集合時間 会場に九時まで

■定員 百名(大代・笠神地区の六十歳以上の方) 定員になり次第締め切ります。

■参加費 無料

■申込方法 十月七日(木)から十月十九日(火)まで、直接または電話で

大代地区公民館へ☎三六四一八四四二

# シベリヤの悪夢(No.二十八)

大代南 後藤 清一

空は低く垂れた雨雲模様であり、ひと雨来そうだ。暫く続いた快晴だったのに。八月二十三日は所定のセレモニーを経て、十五時三十分新潟空港をハバロフスクに向けシベリヤ墓参の旅に発つ。今回で四度目の墓参である。

さて、先月までの「祖国への帰路」を中断し、今回の墓参の道中を書いてみたい。

それは私が過去に訪ねた事のない、険しく淋しい墓地のコースで、今回遺族で参加の兄妹が、積年の思いを今日にかけ、父が眠るウルガル地の墓参が加えられたからである。父の消息は生か死か以前不明であった。

関係機関に訪ねたが、全く手掛かりがなかった。ところが平成十年五月ウルガル地区で病死との広報があり、ただそれだけで詳細は全く不明であった。

兄は方方手をつくし、事実確認を探り二〇二一収容所近くの墓地とわかり、急遽応募し参加した由。出征時兄妹は、三才と一才とのこと。勿論父の顔も声も知らず写真だけの父であった。新婚三年で応召以来は、極貧の暮らして十八歳になった兄は村役場に勤め、妹は保健師として母を助け、今はゆとりのある生活。定年を迎えて永年の夢を果たすべく参加した次第と語る二人であった。二十七才で征った父は「心配すんな必ず元気で帰る。幼な子を頼

む。」と。これが夫婦の最後の会話と語る母であったとのこと。元気な帰りを信じ、待ち続けた母は、まもなく卒寿を迎えるとか。希望者五名で出発、残留者は宿舎周辺の墓参をし、合流は駅でと約し、三時間程先のエルガで下車する。長いまっすぐな鉄道を四キロ程歩き、右折して五百メートル先が墓地が所在するという政府の資料だが確認できず。案内人は現地人の応援を得て、遂にそれらしき墓を発見する。なんとこれが半世紀を眠る父の墓なのだろうか。草むすつち饅頭は崩れ、この現実には兄妹と共にただ呆然とするだけでした。皆で草を刈り祭壇を造り、供物して回向する。二人は、おもむろに持参のセーターを土饅頭に掛け「母さんの手編みよ寒かったろ。父さんあなたは母さんとの約束はウソでしたね。母さんは約束を守り、再婚もせず立派に私達を育ててくれました。」と口説く二人に、俺達は涙して遠くで見守るだけであった。

未だに遺骨も埋葬地も解らない人達も多い。生還された方も深い精神的な後遺症を残し、俺の青春はシベリヤで終わつたと云う人もいる程である。

こんな悲劇的なシベリヤ抑留生活体験者、そして遺族の方々が心から戦後は終わつたと云える日が、一日も早く来るように神かけて祈りたい。再度の巡拝で、多くの友が無念の命を絶たれたこの地で、さまよい続ける貴男方を

思う時、慰めの言葉もなく、ただ鉄魂と祈るだけでした。

## 母と防災

大代南 星 繁子

お盆には、佛様が帰って来ると聞いている。そのお盆の前夜に私はなかなか寝付くことができずとうとう一睡もせずに朝を迎えた。

床の中で、一晩中幼い頃の災害時の母の行動が回想され、母がとても怖かったと語っていた三陸津波の話を思い出した。津波があったのは昭和三年で、母は姉を出産した直後の床にあった時の事、ワドドンと凄まじい音と共に家中に揺れが走り、驚いた母は嬰兒を抱いて、はだして戸外に飛び出した。

地面は舟の様に揺れ、必死で子供を守り、やっと揺れが治まり床に着いたとたん目が見えなくなり、それから盲目の日々が半年程続き大変だったという話を思い出し、無防備でしかも裸足で飛び出したことを反省を含めて語っていた。母の異様な程の防災意識は、ここから生まれたのかな？と、この年になって気がついた。

災害が起きると、普段から父に従順な母は何時も父に指示し、頑固な父もこの時ばかりは母に従った。

① 先ず父は出口を開け、「位牌」を背負って弟達の手を引き戸外に出る。

② 母と私は家の始末である。母は炉の火に水をかけて消し、その間に私は

大きな踏み台を引っ張って電気のパレーカー迄運び、母はその踏み台に恐れもなく上がって電気を止める。

③ 指で一つ一つ確認し、私の手を引いて外に出る。

この間のテレビで、消防の防災マニュアルに指先確認という項目があったが、母は自ら考えてやっていた。

お陰で百年に近い古い家だが、無事故で今に至っている。そんな家族を必死で守ろうとするかいがいい母の姿が目には浮かんで、風化しがちな防災意識を振り返り考えた。老人を介護している我が家ではどうしたら最善なのか・・・

母は他界してまで娘のことを案じて、お盆を期に防災を教えにきたのだろうかと考えると、母の思いを決して無駄にはしないと心に誓った。

近い将来必ず発生するといわれている宮城県沖地震にどう対処すべきか。各家庭ではどうすべきか。有事の際行政の体制はどうなっているのか。まず自分の命は自分で守ることが基本ではあるが不可抗力な事もある。多くの被災地を見ても地域・行政が連携しているところは被害が少なくすんでいるようだ。我が地域でも、地震などの災害が発生したら、慌てずに母のように冷静に行動したい。そのためには普段から、家庭はもとより地域ぐるみの備えが必要だと思う。そんな事を考えたお盆であった。